

詠調子

九月号



花鳥諷詠

9月号 (450号)

日本伝統俳句協会

花鳥諷詠®

令和7年9月■第450号 ————— 目次

花鳥諷詠選集	今井 肖子 2
	山下しげ人 4

「俳句の氣息 岡安家蔵虚子資料」 傍聴記	真篠みどり 7
卯浪	11

一頁の鑑賞	大橋 一弘12
	池末 朱実13

この人の作品	蓮見由美子14
--------------	---------------

虚子研究 『六百五十句』 研究 (67)	15
----------------------------	----

『山田弘子の百句』 山田佳乃著	
その先にあるもの	岸田 祐子21

令和八年（2026年）俳句カレンダー募集句入選者	25
--------------------------------	----

支部だより（関西支部）

令和七年度関西支部大会	27
新刊紹介	29
風報	30

地区行事開催日程表	31
編集後記	32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

表紙 川端龍子「桑港」（「ホトトギス」大正2年7月号）

花鳥諷詠選集

● 今井肖子選

特選五句

亡き人の服を畳めば初蛩

茨木庵 原通子

蛩見に宿下駄許すところまで

生駒南 純子

岩肌に滝ぶつかりて水強し

福岡大石 千鶴

雨粒を微塵にしたる合歡の花

高松和泉 金子

繰り言へ軽くあひづち新茶汲む

鹿児島塚脇 涼子

二句短評

一句目——誰かを偲びながら遺品となった服を畳んでいる作者。ふと目をあげると蛩火がひとつ、そのふと感が「畳めば」でうまく表現されている。また、「亡き人」として具体的に叙さないことで初蛩が生き、余韻ある一句に。

二句目——こちらは旅先だが蛩狩が目的ではなさそうで、昨夜から飛んでいますよ、と言われ、じゃあちよつと見に行くかと。中七下五のさりげなさが佳。いずれの句もかつて蛩は今より身近だったことを思い出させてくれた。

入選六十句

人去りて暮色に揺るる藤の花 福岡 沖永 洋美

風に乗る草刈る音と草の香と 鹿児島 永井 紀子

草笛を吹き旅したき事言はず 名古屋 中野ひろみ

大楠の闇広げゆく梅雨の空 大川 今泉 美代

エベレスト越えアイガーへ罫雲 高知 栗坂 海馬

活火山てふ桜島夏を噴く 福岡 大石 靖子

ほととぎす鳴くに濁音なかりけり 八尾 窪田由紀子

病窓のひと日夜桜朝桜 鎌倉 緒方 初美

アマリス姉の怒りは背中より 東京 梅野 ぎん

蟻地獄見てゐる罪のやうなもの 熊本 井芹真一郎

あるだけの春を捧げん師の遺影 長野 鈴木しどみ

かかりたる獲物へ蜘蛛の躍り出づ 高山 大下 雅子

潮の香の茅花流しの千枚田 石川 宮下 末子

万緑やおもちやのやうな天守閣 島原 三好 立夏

窓よりの景色を白く走り梅雨 久留米 吉田いずみ

四肢解放	こころ解放	風薫る	今治	比留木のぶ子
四阿へ渡る	橋あり	花菖蒲	今治	横田青天子
ト口箱のざらりと滑る	初鰹	太宰府	白石	照子
母の日や母の時計のねちを巻く	始良	五反田加代		
万緑を横切る川の太さかな	東京	荒井	桂子	
夜風ふと甘き香をのせ春の闇	札幌	押野	美江	
ゆらゆらと暗き廊下に糸蜻蛉	神戸	山本	順子	
母の日や小さき母の手をつつむ	東京	加川	尚美	
おそらくは話半分大百足	鳥取	石尾	正子	
解体の土の匂ひや大南風	福岡	青木さえ子		
泰山木白磁の白をもて咲ける	八尾	米澤	悦子	
一と夜さに苗の全滅根切虫	横浜	秋吉美佐子		
萎みたる旅の計画梅雨に入る	仙台	成田	晃子	
夏蝶や誰とも会はぬ村の道	鹿児島	沖	弘子	
雨雲にけぶり樗の花了る	富山	高城	玲子	

バンジージャンプ	万緑に絶叫す	神戸	玉手のり子
紙魚も又美し英霊の父の文	泉大津	多田羅初美	
老鷺やなほ残り火の登り窯	稲沢	山田ひふみ	
実梅もぐ袋へ笊へ空箱へ	香川	照下	璃当
古希祝ふ白磁の小皿さくらんぼ	広島	大井	正治
色沈め雨意の若葉となりにけり	袋井	湖東	紀子
さみどりのうねりに浮かぶ花藻かな	立川	日置	正樹
手のひらで掬ふ金魚の鼓動かな	太宰府	陶山	禎子
新調す親子四人の祭足袋	尾道	大庭	弘
たつぷりの水の耀ふ芒種かな	那珂川	池田ひさ絵	
シャンデリア揺らす風あり夏館	伊賀	前出	公子
睡蓮のゆつたり開く雨の中	宇都	縄田	悦子
木道に雨降りこぼす花菖蒲	東京	関	千恵子
風薫る城下の辻を曲がるたび	長久手	鈴木登志子	
薔薇園の薔薇の絵柄のティースプーン	千葉	駒井ゆきこ	

● 山下しげ人選

特選五句

ト口箱のざらりと滑る初鯉

太宰府 白石 照子

水の香の濃くなる真昼花菖蒲

天理 松田 吉上

一人降り一人乗るバス麦の秋

東京 庄嶋 里子

たつぷりの水の耀ふ芒種かな

那珂川 池田 ひさ絵

松蟬の間あひに遠き波の音

島原 原典子

二句短評

一句目——ト口箱を送り出す人と受け取る人の掛け声。その間を音を立てて滑ってゆくト口箱。水揚げされたばかりの活きのいい初鯉の量感や市場の人々の活気が「ざらり」の一語によって実感として伝わってくる。

二句目——花菖蒲が咲き出す五月頃は、日差しにも力が漲ってくる。真昼ともなると中天に近づく太陽に引つ張られるように水面から花菖蒲が直立し水の香も立ち上がってくる。「真昼」の音のない世界まで描かれている。

パズル解く喜寿の二人の梅雨籠り	千葉 鈴木真沙枝
ひと住まぬ峡となりたる茂りかな	岩手 山口 國男
推敲に一息入るる新茶かな	神戸 田中あかね
吹き上ぐる谷風を呼ぶ網戸かな	朝倉 鶴田 ゆき
二代目の餡はあつさり葛饅頭	東京 鹿谷 白月
花巡るバスは百円城下町	山口 辻岡 伸子
梅雨寒や二の腕抱いて雨宿り	長崎 植村 華文
虚子像の黙にはじかれ夏の蝶	川崎 飯川 三無
青梅の一個のあををまたぎけり	井原 鈴木 千恵
白靴やまつすぐ行けば海のあり	福岡 橋口 貴美
蜘蛛の罫にきらりと光る角度あり	八尾 藤井ケイ子
足元の怖くて蛭そつちのけ	前橋 吉川 えり
木苺に山の日射しの透きとほる	八代 山下さと子
逃げ水や記憶薄れてゆくばかり	鹿児島 松元 靖子
老庭師はやも来てゐる城薄暑	大村 福田 洋子

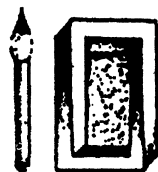
入選六十句

人去りて暮色に揺るる藤の花 福岡 沖永 洋美
 闇深くして螢火の息遣ひ 神戸 岩水ひとみ
 家中の整理整頓風 五月 鳥取 井上登志枝
 穀象のころりと指に死んだふり 長崎 濱口 星火
 峡空を広げてゆきし風 五月 糸島 春田美智子
 句碑披く雨の新樹に染まりつつ 神戸 上岡あきら
 万緑や眼見開く忿怒仏 熊本 山本 淑子
 いくつもの出口明るし木下闇 高松 豊島 禮子
 初夏や森の匂ひの濃くなりぬ 鳥取 砂流 育子
 巨船現はる総立ちの松の芯 磐田 金田みな子
 百二歳祝ふ健啖豆御飯 阿南 鎌田 黄鳥
 沢蟹の迷ひこみたる山の宿 横浜 黒山 敏恵
 産土の山野知り抜き葉狩 高知 坂本喜代子
 畑中の道はまつすぐ麦の秋 行田 細村 雅子
 麦秋の奥に麦秋ある里曲 うきは 中川 壽朗

新緑の色したたらせ雨匂ふ 高松 岡田 貞幹
 静けさを隠れ蓑とし蟻地獄 鳥栖 西山 恵二
 水辺へと歩み戻して薄暑かな 姫路 黒田千賀子
 陽水と一ト日卯の花腐しかな 熊本 宗像 和子
 煙突も銭湯も消え昭和の日 高知 沢田 佳代
 ほととぎす背伸びして干す濯ぎもの 伊賀 光岡代里子
 新茶汲む終のひかりのひと雫 太宰府 川路 泰子
 一年を乗り切る実梅漬けにけり 高知 和田 和子
 紫陽花の真水のごとき色連ね 東京 児島 壽子
 夏掛を蹴つてをさな児夜も育つ 市原 飯塚 咲子
 すいすいと行かぬ掃除機梅雨に入る 神戸 大西美紗子
 雨雲にけぶり樗の花了る 富山 高城 玲子
 栃の花風の高さを捉へゆく 高松 岩瀬由美子
 身ほとりを明るき色に梅雨に入る 吹田 河辺さち子
 紫陽花の雨近づけてゐる重さ 糸島 占部ゆき江

夏燕銀ねず空の破れさう	川西	服部陽桜子
二天門潜り濁世へ梅雨の蝶	横浜	永澤 功
一と雨に引き戻されし若葉冷	石川	水橋眞智子
一村の果てのはてまで麦の秋	宇佐	水野 公明
自家製の新茶に世間話かな	室戸	山本 千秋
天へ地へ法螺の鎮める山開	太宰府	柴田慧美子
芭蕉林水辺の風を畳みつつ	高松	福江 昌子
睡蓮のゆつたり開く雨の中	宇部	縄田 悦子
過去帳にある物語花は葉に	鹿児島	青野 優子
さりげなく新茶を淹れて聞き上手	福岡	梶原 敏子
山梔子の無垢の一花の香に憩ふ	福岡	杉原 芳子
ひと住まぬ峽となりたる茂りかな	岩手	山口 國男
最終の渡船出てゆく月高し	福岡	早間 幸枝
エプロンを叩きて終はる袋掛	松山	渡部美恵子
母帰るまでの友達かたつむり	神戸	小柴 智子

溪流を借景として夏料理	小樽	岩崎スイ子
咲き満ちて四葩に香りなかりけり	武蔵村山	福留 和江
白靴やまつすぐ行けば海のあり	福岡	橋口 貴美
花あふちはんなり暮るる城下町	美作	駿河 亜希
漆黒の潜水艦の浮かぶ夏	静岡	小泉 荒太
瑠璃色のカクテルの底さくらんぼ	神戸	藤丸千香子
桑の実やいつか離れてゆく家族	神戸	光山 恵子
新緑の包み残せし磨崖仏	福岡	工藤 友子
膨らんでゆきし五月の森の色	鹿児島	永里 瑞代
青梅の光溢るゝ竹の筵	横浜	守谷 一劍
引つこ抜く如く釣り上げ初鰹	阿南	田中 栄子
夏萩の紅を育む風と在り	宮若	菅井久美子
このところ卵も産まず羽脱鶏	鳥取	尾田美智子
青蘆やぐんぐ風迷路めく	福岡	伊木田真理子



編集後記

相慕ふ村の灯二つ虫の声 虚子

作者の淋しさから出てくる人懐かしさの情が託されたものを、「慕ふ」と言い切るところに眼目がある。飛躍は五七五の音調に乗せ断言することで、口マンが可能となる。

○長きにわたって協会事務局で務められてきた須川久氏が、九月二十三日を以て退職されます。この間のご尽力に心より御礼申し上げます。

○協会賞の募集を開始いたします。協会賞の選考については、公平性の担保についてより配慮した体制を組む予定です。

(井上泰至)

全国大会会場変更のお知らせ

九月十五日(月)に予定しております岡山の全国大会俳句大会は予想以上の参加申し込みを頂き、会場を変更して、前夜祭と同じ岡山プラザホテルの五階延養の間で行うことになりました。つきましては、事前に申し受けましたタクシー代は、当日お返しいたします。なお、会場変更に伴う受付開始時間等日程の変更はございません。

会場へは、JR岡山駅東出口バスターミナル1番乗り場より

・岡電バス「藤原団地」行き乗車「蓬萊橋・夢二郷土美術館前」(「後楽園前」の次の停留所)下車すぐ

・宇野バス「東岡山線」乗車「浜(プラザホテル前)」下車すぐ

問い合わせ先
伴 明子

TEL〇八〇―一六四四―六四〇四

名木田純子

TEL〇九〇―七八九七―三七一五

●花鳥諷詠選選者予定

掲載	締切り	選者
12月号	9月20日	井上泰至 荒川とも多
1月号	10月20日	今井肖子 戸田祐一
2月号	11月20日	井上泰至 東構東子
3月号	12月20日	今井肖子 吉井たくみ

花鳥諷詠九月号(通巻第四五〇号)

定価一、二〇〇円 但し、本代は年会費に含む
年会費一〇、〇〇〇円

令和七年九月一日

発行人 井上泰至

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二―B―一八九

シャンブル笹塚二―B―一〇一

電話 〇三三四五五五―一九一

FAX 〇三三四五五五―一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇一七―八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一―一九二